

英語スピーキング技能の伸長を主目的とする コミュニケーション IA における実践

鬼田 崇作

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

筆者の勤務校では、教養教育改革の一環として、学生の英語力向上を目的に、約半数の主専攻プログラムにおいて、平成23年度から教養教育における英語科必修単位が従来の6単位から8単位に増加された。これに伴い、増加する授業数にチームとして対応するため、学士課程における教養教育の英語科目を管理運営する外国語教育研究センターは特任教員の採用を新たに行った。

筆者は特任教員の一人として外国語教育研究センターに着任し、平成23年度前期においては、スピーキング活動を中心とする「コミュニケーション IA」、リーディング活動を中心とする「コミュニケーション IB」、大学院生の英語力向上を図る「プレ・アカデミック・イングリッシュ II」を担当した。本稿では、この中でも比較的担当教員による裁量の大きい¹⁾「コミュニケーション IA」における実践について報告する。

2. 学士課程教養教育におけるカリキュラム改革の概要

広島大学では、多様な習熟度の学生に対して、より丁寧な教育的支援を行い、また、学生の英語力向上を主な目的として、各授業担当者のコミットメントを確保しつつ、評価規準と基準を明示し、科目としての統一を図るなど、教養教育における英語科目の改革に取り組んできた。平成23年度からは、学生の英語要修得単位を6単位から8単位へ増やし、学生は以下のように単位を習得することとなった。

表1 広島大学の教養教育における英語授業と単位数

学期	授業科目	単位数
1年次 前期	コミュニケーション IA (スピーキング中心)	1単位
	コミュニケーション IB (リーディング中心)	1単位
	コミュニケーション基礎 I (語彙, 文法中心: 新規開設)	1単位
1年次 後期	コミュニケーション IIA (ライティング中心)	1単位
	コミュニケーション IIB (リスニング中心)	1単位
	コミュニケーション基礎 II (語彙, 文法中心: 新規開設)	1単位
2年次 各期	コミュニケーション IIIA (発表技能中心)	1単位
	コミュニケーション IIIB (理解技能中心)	1単位
	コミュニケーション IIIC (特色ある「ことば」の教育: 新規開設)	1単位

注: 2年次は各期1科目、1単位を選択

表1に示すとおり、1年次においては、「コミュニケーション基礎 I」、「コミュニケーション基礎 II」が新たに開設された。この科目では、学生が語彙、文法について、WEBを用いた自学自習形態で学習を行う。また、2年次においては、「コミュニケーション IIIC」を新規開設し、

教員の専門性を生かした「ことば」の教育を行うことを目指し、目的別に複数の授業を開講し、学生が主体的に選択できる部分を増やした。

また、1年次の発表技能中心クラスと理解技能中心のクラス間の連携をスムーズに行うため、前者（「コミュニケーション IA」, 「コミュニケーション IIA」など）は後者（「コミュニケーション IB」, 「コミュニケーション IIB」など）の1クラスを2分割することにより編成された。さらに、学生にきめ細やかな教育を提供し、教員間の連携をスムーズに行うため、クラスサイズの上限を設け、英語必修単位が8単位となる1年生は、原則として外国語教育研究センターの教員が担当することとなった。

3. コミュニケーション IA における授業実践の概要

3.1. 担当授業における学生の英語習熟度

筆者が担当した「コミュニケーション IA」においては、学生の所属学部によってブロックが分けられており、筆者は(1)工学部、(2)法学部、(3)医学部・歯学部・薬学部（以後、医・歯・薬学部）、(4)教育学部、(5)理学部・生物生産学部（以後、理・生学部）、の5クラスを担当した。「コミュニケーション IA」のクラス編成は、入学時に学生から自己申告される「大学入試センター試験」の英語得点をもとに、習熟度別クラスが編成される。筆者が担当した各クラスの学生が大学へ入学した直後である5月時点に受けたTOEIC IPテストの結果は表2のとおりである。

表2 各クラスの5月時点における TOEIC IP テストの結果

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
工学部	340	560	444.3	64.9
法学部	290	650	479.8	93.7
医・歯・薬学部	325	715	534.5	91.6
教育学部	325	600	464.1	71.0
理・生学部	295	515	384.8	59.1

表2が示すとおり、最も平均値の低いクラスは理・生学部のクラスであり、TOEIC IPテストの平均値が400点に満たない。他方、最も平均値の高いクラスは医・歯・薬学部からなるクラスであり、平均値が500点を超え、700点以上の学生も2名いる、比較的習熟度の高いクラスであった。

3.2. 使用教科書の概略

「コミュニケーション IA」においては、すべてのクラスで MacMillan Languagehouse 社から出版されている *BY THE WAY ... - Strategies for Successful Conversation* を教科書として用いた。この教科書では、Hiro, Emi という日本人大学生がカリフォルニアにある大学へ留学し、それぞれのルームメイトである Sean, Julie との交流を通して物語が展開される。教科書は全12ユニットから構成されており、その内容は「自己紹介をする」、「買い物へ行く」、「就職活動をする」など日常生活と密接に関わる内容である。筆者がこの教科書を選択した理由は、その内容が「コミュニケーション IA」の統一シラバスの内容²⁾と合致すると考えたためである。

授業は教科書の内容に沿って進めた。教科書の構成は、まとめ Unit を除き一定であり、1つ

の Unit は次の内容で構成された。

- (1) Vocabulary (当該 Unit 内で重要な単語の確認)
- (2) Quick Chats (当該 Unit の内容に関連するダイアログのディクテーション)
- (3) Main Conversation (当該 Unit での習得が期待される言語表現を含む本文)
- (4) Conversation Extension (Main Conversation の続き)
- (5) Conversation Strategy (当該 Unit において習得が期待される言語表現の紹介)
- (6) Putting It All Together (当該 Unit の様々な言語材料をまとめた活動)

本教科書では、各 Unit で Conversation Strategy が2つと、それを実現するための言語表現がいくつか紹介され、それらの表現を習得することが主たる目的である。そのため、上記(1)の単語導入を除き、(2)から(6)までの内容は、当該 Unit で導入される Conversation Strategy とそのための言語表現を中心に、物語の構成が考えられている。各 Unit の Conversation Strategy と主な言語表現は表3のとおりである。

表3 教科書の各 Unit におけるテーマと導入された主な言語表現の例

Unit	Conversation Strategy	主な言語表現の例
1	Meeting people	<i>How's it going?</i>
	Bouncing	<i>How about you? And you?</i>
2	Getting time to think	<i>That's a good question ..., Let me see ...</i>
	Asking for more information	<i>What do you mean?, In what way?</i>
3	Agreeing	<i>Me too, Me neither,</i>
	Disagreeing	<i>Really? I don't like ... / I think</i>
4	Getting more information	<i>For example?, Like what?,</i>
	Getting more details	<i>What else?, Anything else?</i>
5	Explaining	<i>Oh, what do you call it?</i>
	Body language	ジェスチャーの紹介
7	Using tag questions	<i>It is ..., isn't it?, You are ..., aren't you?</i>
	Giving compliments	<i>You're really good at ..., That's a nice ...</i>
8	Making suggestions	<i>How about ...?, Why don't I/you/we ...?</i>
	Responding to suggestions	<i>That sounds good, Good idea.</i>
9	Checking for understanding	<i>Does that make sense?,</i>
	Summarizing	<i>So, you're saying ..., So, you mean ...</i>
10	Changing direction	<i>Speaking of ..., That reminds me ...</i>
	Changing the topic	<i>By the way ..., Well before I forget ...</i>
11	Sharing news	<i>Guess what?, I have something to tell you.</i>
	Reacting to news	<i>No way!, Are you serious?</i>

注：Unit 6およびUnit 12はまとめの Unit であるため、新たな表現は導入されない

このように、使用した教科書においては、各 Unit のテーマに関連のある言語表現が導入され、それらを上記の Quick Chats や Main Conversation において用いることにより、その定着を図ることが期待される。

3.3. セメスターの計画

全15回の授業の計画は表4のとおりであった。

表4 セメスターにおける授業計画

授 業 内 容	
第1回	オリエンテーション
第2回	単語テスト, 教科書 Unit 1: Good to Meet You
第3回	単語テスト, 教科書 Unit 2: It Runs in the Family
第4回	単語テスト, 教科書 Unit 3: School Daze
第5回	単語テスト, 教科書 Unit 4: You Are What You Eat
第6回	単語テスト, 教科書 Unit 5: Shop 'Till You Drop
第7回	単語テスト, 教科書 Unit 6: Review 1 -TGIF-
第8回	単語テスト, 教科書 Unit 7: Friends
第9回	単語テスト, 教科書 Unit 8: Road Trip
第10回	単語テスト, 教科書 Unit 9: Blind Date
第11回	単語テスト, 教科書 Unit 10: Job Hunting
第12回	教科書 Unit 11: Let's Catch a Flick
第13回	教科書 Unit 12: Review 2 -School's Out-, 学期末課題の準備
第14回	学期末課題の準備
第15回	学期末課題 (英語劇)
第16回	学期末試験

3.3.1. 通常授業の構成

授業においては、基本的には授業開始時に単語テスト³⁾を行い、その後、教科書の内容に沿って授業を行った。各授業においては、Nation (2007)の four strands の考えに基づき、Meaning Focused Input, Meaning Focused Output, Fluency Development, Language Focused Activity の4種類をバランスよく行うように心がけた。

教科書内の各 Unit の構成は、(1) 当該 Unit 内での重要単語の確認、(2) 当該 Unit の内容に関連するダイアログのディクテーション、(3) Main Conversation、(4) Conversation Extension⁴⁾、(5) 当該 Unit の Conversation Strategy の導入、であった。

(1) 当該 Unit 内での重要単語の確認においては、ペアでの学習を行った。具体的には、英単語とその日本語訳から成るリストを配布し、ペアでその単語と日本語訳を学習し、問題を出し合うという形式であった。また、学生が発音できないであろう単語については、音声を聞かせることにより発音の確認を行った。

(2) 当該 Unit の内容に関するダイアログのディクテーションにおいては、(a)教科書を見ながら空欄の単語を聞きとる活動、(b)教科書を見ずに音声を聞き、ひと通り聴き終わった後で教科書を開き、空欄に入る単語を思い出す活動、の二種類を用いた。(a)については、各授業の冒頭において導入された単語を聞きとることができるか否か、(b)については、ダイアログ全体を聴解し、その内容を再生できるか否か、という観点から行い、前者は教科書を用いた授業全12回のうち前半に、後者については後半に行った。

(3) Main Conversation においては、Unit の中心となることから、Main Conversation の言語

材料を用いて、音読を中心とする様々な活動を行った。活動においては磯田(2010)で紹介されている「音読の工夫」(pp.131-145)を参考とした。Main Conversationでの活動は、各授業の中心となるため、ここでは先述のNation(2007)によるfour strandsの考え方を特に重視し、4種類の活動をバランスよく行うように心がけた。全授業15回のうち、前半はMeaning Focused Input, Language Focused Activityを重視し、後半はMeaning Focused Output, Fluency Developmentを重視した。具体的には、前半はディクテーションやスラッシュリーディング、あるいは英語のリズムの強弱を重視した音読などを行うことにより、英語の特徴を意識しながら意味理解を重視する活動を取り入れた。また後半は日本語の内容を素早く英語で話す活動、インフォメーション・ギャップを用いた強制アウトプットの活動などを用いることにより、簡単な英語を素早く産出する活動を取り入れた。

(4) Conversation Extensionにおいては、教科書に付属する内容理解問題の回答を中心に行った。毎授業において、まず問題を先に読み、聞き取るべき情報は何かを確認した後、Conversation Extensionの音声聞かせた。これにより、英語が不得意な学生でも、心的な負担が軽減されるように配慮を行った。さらに、一度音声を聞いて内容理解問題に回答を行った後、もう一度音声を聞かせて、内容確認を行った。

(5) 当該UnitのConversation Strategyの導入においては、それまでの(1)から(4)を総合した活動を行った。まず、教師が教科書に載っている例文をもとに、それぞれのStrategyが果たす機能、使用される主な場面について、解説を行った。次に、学生はペアになり、例文の音読を行った。その後、各Strategyを使わせるように工夫された教科書内の活動をペア・グループで行った。また、活動によっては、ペア・グループ活動の後、数ペア・グループを指名し、クラス全体の前で発表させた。

3.3.2. 学期末の課題

上記の通常授業のまとめとして、学期末に英語劇の課題を行った。この課題は、教科書の主要登場人物であるHiro, Emi, Sean, Julieの4人について、教科書のその後のストーリーをグループで創作し、それを演じるという課題である。ストーリーの創作においては、教科書の最終場面の数週間後、数年後、数十年後など、グループごとに自由に創作して良いこととし、学生の自主性を尊重した。演劇時間は1グループ5分を基準とし、プラスマイナス1分程度に収まるようにストーリーを構成するように求めた。また、グループ内で協力し合うことを求め、創作されるストーリーの面白さも評価されると学生には伝えた。さらに、演劇の実演においては、演劇の完成度も評価することを伝え、学生には英語のセリフを覚え、必要に応じて自然な身振り手振りで役をこなすように求めた。

英語劇の準備期間としては、第13回授業と第14回授業の2週間を用いた(表4参照)。グループ分けは教師が行い、履修者名簿に沿って、機械的に3人グループか4人グループを作成した。4人グループの場合は、教科書の登場人物を一人一役で演じることとし、履修人数の都合で3人グループになった場合は、教科書の登場人物4人のうち3人を選ぶように指示した。

第15回の最終授業において、英語劇の実演を行った。学生が考えたストーリーは、Hiroが実は宇宙人であるというオチがつくものや、“I'm Hiro and hero.”を決め台詞とするヒーローであるとするものまで、非常にバラエティに富むものであった。また、プレゼントを買いに行くという場面において、模造紙でできたネックレスなどの小道具を持参したり、グループ内の二人が役

を演じている間に、残りの学生がBGMを歌ったりするなど、「演劇の完成度を評価する」という指示は良く機能していたと考えられる。

各グループの演劇終了後には、(1)ストーリーの面白さ、(2)演劇の完成度、(3)英語セリフの流暢さ、(4)英語セリフの文法的正確さ、(5)英語セリフの発音の正確さ、(6)英語セリフのわかりやすさ、の6つの観点が示された評価シートを用いて、学生同士の相互評価を行った。それぞれの観点は、1：very badから5：very goodまでのレイティングを行う形式であった。また、評価シートの下部にはコメント欄を設け、演劇の感想を書くように求めた。

3.4. 成績評価

成績の評価は、(1)学期末試験、(2)学期末の英語劇、(3)単語テスト、(4)授業内パフォーマンス、の4点を総合して評価した。

(1) 学期末試験は、(a)教科書で導入された英単語の意味を問う問題、(b)談話完成テストのように、ダイアログの一部を示し、その後続くべき発話として最も適切なものを選ぶ問題、(c)英語でのエッセイの三種類から構成された。

(2) 学期末の英語劇の評価は、上述の(1)ストーリーの面白さ、(2)演劇の完成度、(3)英語セリフの流暢さ、(4)英語セリフの文法的正確さ、(5)英語セリフの発音の正確さ、(6)英語セリフのわかりやすさ、の6つの観点で評価した⁵⁾。

(3) 単語テストは、毎回の授業(第2回から第12回までの10回)の冒頭で実施した単語テストであった。

(4) 授業内パフォーマンスについては、毎回の授業において行う種々のコミュニケーション活動に積極的に参加しているかどうかを基準に評価した。

4. 実践の結果

4.1. 毎授業における単語テストの成績の推移

筆者担当の「コミュニケーションIA」においては、第2回授業から第11回授業まで、授業の冒頭で単語テストを行った。各クラスにおける成績の推移は図1のとおりである。

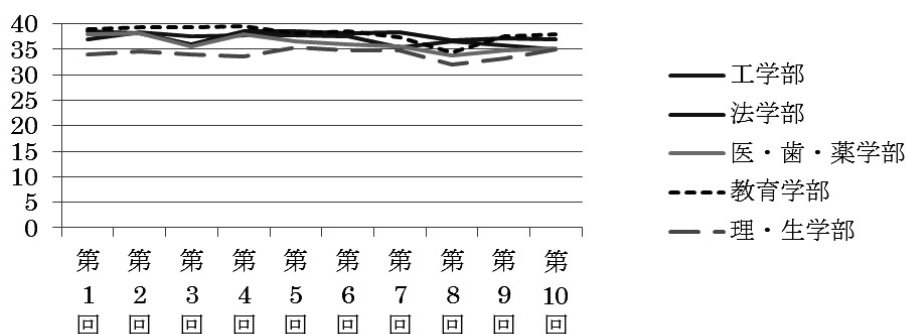


図1 各クラスにおける単語テストの得点の推移 (Max = 40)

図1が示すとおり、どのクラスにおいても、平均点がほぼ35点を上回っており、ある程度満足できる結果であると考えられる。ただし、クラス全体の平均点が35点に満たない回もいくつか見

られることから、このような場合には指導が必要となるであろう。

4.2. 授業評価アンケートの結果

本節では、実践を行った結果として授業評価アンケートの結果を示す。授業評価アンケートの項目は、次に示すとおりである。

- (1) あなたはどのくらいの割合で遅刻せずに授業に出席しましたか。
- (2) あなたは真剣に授業に取り組みましたか。
- (3) あなたは予習・復習にどの程度の時間を使いましたか。
- (4) 実施した授業は、シラバスに沿っていましたか。
- (5) 授業の難易度は適切でしたか。
- (6) 授業の進度は適切でしたか。
- (7) 教科書、参考書、補助教材、配布資料等は授業内容の理解に役立ちましたか。
- (8) 教員の説明はわかりやすかったですか。
- (9) 教員の授業に対する準備は十分でしたか。
- (10) この授業を履修してよかったと思いますか。
- (11) 授業の方法や取り組みで、良いと思ったことを書いてください。
- (12) 授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください。
- (13) 小テストや提出課題、授業内での指名などを通じ、学習したことのフィードバックや確認は多くなされましたか。
- (14) 宿題や課題、予習などの量と内容は適切でしたか。
- (15) 教員は、授業が単調にならないよう、いろいろな工夫をしているように思いましたか。
- (16) あなたはこの授業を受けて、この外国語の知識や技能が向上したと思いますか。

これらの項目の中から、授業内容に関する質問であり且つ全学平均値との比較が可能である項目(3)から項目(10)について授業実践結果を示す。また、自由記述項目である項目(11)および項目(12)についての結果も示す。

4.2.1. 授業評価アンケートの各項目における全学平均との比較

筆者担当授業における評価アンケートの結果と全学平均値の結果は表5から表12に示すとおりである。

表5 項目(3)「あなたは予習・復習にどの程度の時間を使いましたか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	1. 授業時間の 0.5倍未満	2. 授業時間の 0.5~1倍	3. 授業時間 の1~2倍	4. 授業時間 の2倍以上	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	10	8	7	2	2.0	2.2
法学部 (n = 12)	6	4	2	0	1.7	2.2
医・歯・薬学部 (n = 16)	8	2	6	0	1.9	2.2
教育学部 (n = 13)	6	4	3	0	1.8	2.2
理・生学部 (n = 15)	7	4	4	0	1.8	2.2

この項目においては、すべてのクラスで全学平均値を下回っている。このことから、筆者の授業においては、授業外で行う学習時間が不足していたことが窺える。本授業においては、宿題を課すということは無かったため、授業外での学習時間が少なかったものと推測される。

表6 項目(4)「実施した授業は、シラバスに沿っていましたか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	1. そう思わない	2. あまりそう 思わない	3. そう思う	4. 強くそう思う	本授業平均値	全学平均値
工学部 (n = 27)	0	2	18	7	3.2	3.2
法学部 (n = 12)	0	0	8	4	3.3	3.2
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	0	13	3	3.2	3.2
教育学部 (n = 13)	0	0	10	3	3.2	3.2
理・生学部 (n = 15)	1	0	10	4	3.1	3.2

この項目においては、いずれのクラスにおいても、ほぼ全学平均値と同程度の値を示していることから、授業内容とシラバスとの一致に関して、大きな問題はなかったものと考えられる。

表7 項目(5)「授業の難易度は適切でしたか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	2. かなり易 しすぎる	2. かなり難 しすぎる	3. やや易し すぎる	3. やや難し すぎる	4. 適切	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	0	0	5	1	21	3.8	3.6
法学部 (n = 12)	0	0	1	0	11	3.9	3.6
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	0	0	3	13	3.8	3.6
教育学部 (n = 13)	0	1	2	2	8	3.5	3.6
理・生学部 (n = 15)	0	1	3	2	9	3.5	3.6

本項目においては、工学部、法学部、医・歯・薬学部において比較的高い値を示し、全学平均値よりも高い結果となった。これらのクラスでは、授業の難易度については概ね適切であったと考えられる。

他方、教育学部と理・生学部においては、全学平均値よりも低い値となった。この理由は明確ではないものの、1つの可能性としては、この2クラスの英語習熟度(表2参照)が比較的低いことが考えられる。筆者担当の「コミュニケーションIA」においては、すべてのクラスで同じ教科書を用いて、授業構成もほぼ統一されていた。そこで、習熟度の異なるクラス間で同じ活動を行う場合は、習熟度の高いクラスでは活動の準備時間を短くし、習熟度の低いクラスでは準備時間を長くするなどの方法で授業の難易度を調整していた。本アンケート項目の結果は、教育学部および理・生学部においては、そのような調整方法がうまく機能していなかった可能性を示すものと考えられる。

表8 項目(6)「授業の進度は適切でしたか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	2. かなり 遅すぎる	2. かなり 速すぎる	3. やや遅 すぎる	3. やや速 すぎる	4. 適切	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	0	0	2	2	23	3.9	3.8
法学部 (n = 12)	0	0	0	0	12	4.0	3.8
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	0	0	1	15	3.9	3.8
教育学部 (n = 13)	0	1	0	0	12	3.8	3.8
理・生学部 (n = 15)	1	1	0	0	13	3.7	3.8

本項目においては、理・生学部以外は全学平均値よりも高い値となっている。また、理・生学部においても、全学平均値との差は僅かであることから、授業の進捗については、すべてのクラスで概ね適切なものであったと考えられる。

表9 項目(7)「教科書、参考書、補助教材、配布資料等は授業内容の理解に役立ちましたか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	1. そう思 わない	2. あまりそう 思わない	3. そう思う	4. 強くそ う思う	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	0	4	16	7	3.1	3.2
法学部 (n = 12)	0	0	8	4	3.3	3.2
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	2	8	6	3.3	3.2
教育学部 (n = 13)	0	1	5	6	3.4	3.2
理・生学部 (n = 15)	0	0	5	8	3.6	3.2

本項目においては、理・生学部以外は、概ね全学平均値と同程度の値を示している。しかし、工学部において「2. あまりそう思わない」との回答が27名中4名(約15%)いることから、この点に関しては来年度以降の課題と考えられる。

他方、理・生学部においては、全学平均値よりも高い値が得られた。授業内容、配布資料は他のクラスと同様であることから、理・生学部において高い値が得られた理由は不明確であるものの、学生から一定の評価を受けていると考えられる。

表10 項目(8)「教員の説明はわかりやすかったですか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	1. そう思 わない	2. あまりそう 思わない	3. そう思う	4. 強くそ う思う	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	0	2	16	9	3.3	3.1
法学部 (n = 12)	0	1	8	3	3.2	3.1
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	0	10	6	3.4	3.1
教育学部 (n = 13)	0	3	7	3	3.0	3.1
理・生学部 (n = 15)	2	0	6	7	3.2	3.1

本項目においては、唯一、医・歯・薬学部での値が若干高いものの、すべてのクラスで全学平均値と同程度の値を示している。筆者担当の「コミュニケーションIA」の授業においては、英語を話すことに慣れ、各場面で有効な言語表現の定着を図ることを目的としたため、文法項目などの細かな説明は行わなかった。本項目において「1. そう思わない」や「2. あまりそう思わない」を選んだ学生にとっては、その点に不満を持った可能性が考えられる。

表11 項目 (9)「教員の授業に対する準備は十分でしたか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	1. そう思 わない	2. あまりそ う思わ ない	3. そう思 う	4. 強くそ う思 う	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	0	0	17	10	3.4	3.2
法学部 (n = 12)	0	1	7	4	3.3	3.2
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	0	9	7	3.4	3.2
教育学部 (n = 13)	0	1	6	6	3.4	3.2
理・生学部 (n = 15)	1	0	8	6	3.2	3.2

本項目においても、すべてのクラスで全学平均値と同程度の値を示している。しかし、ほぼすべてのクラスにおいてその値は若干ではあるものの全学平均値よりも高い値を示していることから、授業準備においては、学生がある程度納得するものであったと考えられる。

表12 項目 (10)「この授業を履修してよかったと思いますか」における本授業の度数分布・平均値と全学平均値 (Max = 4)

	1. そう思 わない	2. あまりそ う思わ ない	3. そう思 う	4. 強くそ う思 う	本授業 平均値	全学 平均値
工学部 (n = 27)	0	2	18	7	3.2	3.2
法学部 (n = 12)	0	0	9	3	3.3	3.2
医・歯・薬学部 (n = 16)	0	0	10	6	3.4	3.2
教育学部 (n = 13)	1	2	3	7	3.2	3.2
理・生学部 (n = 15)	1	2	8	4	3.0	3.2

最後に、本項目においても、すべてのクラスでほぼ全学平均値と同程度の値を示している。しかしながら、唯一、理・生学部においては全学平均値を下回っている。すべての学生を満足させる授業は難しいものの、一人ひとりの学生の授業内での状況を把握するなど、親身な指導をさらに心がける必要がある。

4.2.2. 授業評価アンケートにおける自由記述の結果

ここでは、授業評価アンケートにおける自由記述の2項目（「11. 授業の方法や取り組みで、良いと思ったことを書いてください」、「12. 授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください」）について、学生の自由記述の結果を示す（全て原文のまま）。

項目(11)授業の方法や取り組みで、良いと思ったことを書いてください

- ・英語を話すのは難しいけど、あいづちなどは大事なんだなと思いました。(工学部)
- ・普段英語を使用して話す機会というものがあまりないので、劇や講義中の音読などは良かったと思います。(工学部)
- ・会話、劇など、面白い取り組みがあった(法学部)
- ・毎回違った形での実験的な英語の学習があり楽しめた。(法学部)
- ・全員参加式の授業やグループ学習(法学部)
- ・小テストで単語がある程度覚えられた(医・歯・薬学部)
- ・劇が楽しかった(医・歯・薬学部)
- ・音を聞くことを重点においているように思うのだが、自分は今、使える英語を勉強しているんだなと思って本当にいいと思う。先生が最初に紹介された「shadowing」という方法はListening力やspeaking力をさらに鍛えるために使えそうだった。英語力を向上させる方法がほかにもあれば、どんどん紹介していただきたい。(医・歯・薬学部)
- ・講義の進め方が非常に良かった。(教育学部)
- ・楽しく英語を学ぶことができたのでよかったです。ありがとうございました。(教育学部)
- ・シャドーイングやリズムに合わせての発音など面白かったです(教育学部)
- ・シャドーイングやクロスワードなど、いろいろなことがあって、飽きずに楽しく学習ができました。(教育学部)
- ・すごく楽しかったです。(教育学部)
- ・講義の取り組みの仕方の工夫(シャドーイングをしたり、リスニングと単語を覚える順番を変える、劇をさせる)を授業を受けて学生に英語を身に付けさせるにはどうすればいいかを試行錯誤してるんだなと思い、真摯に学生と向き合っている気がしました。(理・生学部)
- ・講義内で単語を覚える時間があり、単語の定着ができたこと。(理・生学部)

自由記述の結果から、「あいづちなどは大事なんだなと思いました」のように、本授業において焦点を当てていたConversation Strategyの重要性を学生も幾分認識した様子が見て取れる。また、シャドーイングや音読などの活動を工夫することにより、学生が英語学習を楽しんだと考えられる。

他方、授業についての改善点に関しては、以下のような自由記述コメントが得られた。

項目(12)授業の方法や取り組みで、改善すべきと思ったことを書いてください

- ・グループ学習の大変さと90分の試験の両立は厳しかった(法学部)
- ・あててほしくない(医・歯・薬学部)
- ・講義がいつも時間いっぱいや少しオーバーして行われていて、次の授業に何回か遅刻してしまったので何らかの配慮があると助かるなと思いました。(理・生学部)
- ・リスニングの解答をもっと明確に表したほうが良いと思ったこと。(理・生学部)

項目(11)に比べ、記述量が少なかったものの、「リスニングの解答をもっと明確に表したほうが良いと思ったこと」などの記述からは、問題の答えとその解説について不満を持っている学生の姿が想像される。この点に関しては、来年度以降の課題と考えられる。

5. 終わりに

本授業においては、英語スピーキング力の伸長を目的として、Conversation Strategy に焦点を当てた教科書を用いた実践を行った。種々の Conversation Strategy が用いられた教科書をもとに様々なコミュニケーション活動を行った結果、学生からある程度の評価を得られたと考えられる。また、学期末に英語劇の課題を行ったことにより、それまでに学習した内容を踏まえ、楽しみながら英語学習に取り組めたものと考えられる。

本稿においては、授業実践結果の解釈として主に学生による授業評価アンケートを用いた。しかし、授業評価アンケートの結果からは、授業で扱った言語項目がどの程度学生に定着したのかは判断できない。今後の課題としては、授業実践の結果、学生の英語力の伸長にどの程度貢献したのかを検証することが挙げられる。

注

- 1) 「コミュニケーション IB」においては、教科書は指定されており、また「プレ・アカデミック・イングリッシュ II」においては、eラーニングのコンテンツが指定されている。
- 2) 「コミュニケーション IA」の統一シラバスにおける授業の目標は、「日常的な場面において適切に英語で口頭表現する力をつける。また、相手の社会的・文化的背景を意識して、英語で自分のまとまった考えや意見を明確にかつ簡潔に表現する力を養う。」とされている。
- 3) 授業開始時に行う単語テストは、別授業である「コミュニケーション基礎 I」の学習範囲であった。これは、科目を超えて同じ範囲の試験を複数回行うことにより、学生の単語学習がより促進されると考えたためである。
- 4) Main Conversation の続きを示すものであり、本授業においては、主として Conversation Extension の一部を取り扱った。
- 5) 学生同士の相互評価も同様の基準で行なっているが、学生の相互評価は演劇後に他グループからどのような判断がなされたかを知るための peer feedback という役割に留め、成績評価には加えていない。

参考文献

- 磯田貴道 (2010). 『教科書の文章を活用する英語指導—授業を活性化する技108—』東京：成美堂.
Nation, P. (2007). The four strands. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 1, 2-13.

ABSTRACT

Classroom Practice in Communication IA to Foster Improvement in Students' English Speaking Competence

Shusaku KIDA

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

The purpose of this paper is to show the author's classroom practice in Communication IA classes and how it was received and evaluated by the students. This paper will at first briefly explain the curriculum reform for undergraduate students at Hiroshima University. Next I will show the details of my classroom practice which focuses on the following aspects; the textbook, classroom activities, the semesters' schedule, and the manner of grading students. Finally, this paper will report on the results of the evaluation questionnaire which asked the students to evaluate the author's Communication IA classes from various viewpoints.

The results of the questionnaire showed that the mean scores for the majority of the answers were similar in comparison to those of the whole university. These results can be interpreted to reveal that the author's classroom practice resulted in students being satisfied, but provides incentive for further improvement.